

上海市を書くのは、今回が2度目である。1度目は、2011年11月号(168号)である。この時は上海に旅行された日本人は非常に多いであろうし、私が有名な観光名所を書くのも如何なものかと思ったので、「タテ軸(歴史)の上海」として12～13世紀以降の歴史に登場する上海について別の角度から書いてみた。今回はどちらかと言えば、「ヨコ軸の上海」である。さらに、上海から向かった「普陀山」という仏教の聖地がとても深く印象に残ったので普陀山について詳述した

い。上海にご関心のある方は、ネットで168号を参照して頂ければと思う。

昨年9月24日、成田発CA158便(中国国際航空)は、上海に向けて飛び立った。昨年の夏、大連に在住の中国人の友人が普陀山に行こうと何度も言うので、まだ行ったことがない所でもありそちらに行くことにした。大連で仕事をしている時、知人が普陀山に今年も行ってきたと言うのでそんなに何度も行くところなのかな?とっていた。いろいろ調べてみると、そこは中国の四大仏教聖地のひとつであることを知った。

普陀山行きを勧めた友人は信仰心が篤く、毎月1日と15日には欠かさず大連市内にある松山寺という寺院にお参りすると言う。なぜ1日と15日なのかは分からない。私も一度15日に松山寺にブラリと出かけてみたが境内は人でごった返していた。中国国内はどの宗教の信者が多いのか、私ははっきりとは知らない。日本と異なりイスラム教寺院(清真寺)や道教寺院があちこちにあり、また内陸部では日本の氏神様の信仰のような地域もあるであろうが、やはり仏教信者が一番多いのではないだろうか。



揚州飯店門口

9月24日、飛行機は無事上海浦東空港に着陸した。定刻より約30分早く着陸したため上海の友人はまだ来ていなかったが、ほどなく手を振りながら現れた。友人は山東省の出身であるが、大連外国語学院で日本語を学び、卒業後上海で仕事をしている。彼女は大連で中国語教室に通ったときの私の先生である。まもなく大連から春秋航空が定刻通りに到着し2人の友人とも合流することが出来た。

我々は上海の友人のご主人の車で取りあえずホテルまで送っ

ていただくことにした。ご主人とはホテルで別れ、我々4人は昼食に行くことにした。レストランは事前に友人に伝えてあった「揚州飯店」に案内していただいた。このレストランは南京路で一番賑やかなあたりからほんの少し入ったところにあった。店の前に立った時、貫録があり歴史を感じる佇まいに私はここにしておかたと思った。ところがである。ドアを開けた途端、お店の人に「お昼は2時で終わり」と申し渡された。我々が着いたのは2時をほんの少し回っていたが、まさかだめだとは夢にも思わなかった。交渉してもらったが「不可以」の一言。夕方また来ればいいと思い、すぐ近くの店で昼食を摂ることにした。実は旅行に行く前に、田井さんから「以前Yさんが上海に行った時、揚州飯店の五目チャーハンがとても美味しかったと言ってましたよ」との情報を入れていただいていたのである。昨年の‘わんりい’9月号で揚州市について書き、そこで五目チャーハンの由来を書いたことでもあるし、この店で食べようと思っていたのである。

食後、大連から来た二人のうち一人は上海は初めてで豫園や南京路を見て回りたいと言うので二



宋慶齡故居入口

手に分かれ、私と上海の友人は以前からぜひ見たいと思っていた「宋慶齡故居」に行くことにした。タクシーに乗ると、ほどなく宋慶齡故居に着いた。そこは淮海中路に面していた。道路に沿って高さ3メートルくらいのグレーの長い壁が続き一目で彼女が住んでいた邸宅だと分かった。宋慶齡は、宋家の三姉妹（「宋姉妹」という書名の文庫本が角川文庫から出版されている）の次女である。

あまりご存じでない方のため、故居の案内をする前に少し宋慶齡の人生を辿ってみたい。彼女は1893年（明治26年）1月27日に上海で生まれた。父は客家である宋耀如、母は倪桂珍と言った。資産家の家に生まれ何不自由なく育った彼女は、上海市内にある「上海中西女塾高中」卒業後、14歳で長女・霽齡の留学先でもある米国・ジョージア州のウエスレイン大学に入学した。1912年、前年の辛亥革命を経て中華民国・南京臨時政府が成立し、孫文が臨時大統領になる。卒業後、1913年に帰国。翌年から父が支援していた孫文の英文秘書を務めた。1915年10月に東京で孫文と結婚（孫文は3度目の結婚）。結婚後は孫文の活動を必死に支えた。1925年彼女が32歳の時、心から尊敬していた孫文が死去。（享年59歳）翌年中国国民党・中央執行委員になる。その後、蒋介石や宋一族との対立を深めていく。1945年第二次世界大戦が終わり、1949年に中華人民共和国が成立。中央人民政府副主席を務める。1959年には国家副主席に就任。1966年から1976年までつづいた文化大革命の中で、資産家の出であったことなどから捕えられそうになるが

毛沢東により窮地を脱する。1976年毛沢東死去。1981年病気が悪化し危篤となる。時の第5期全人代常務委員会は彼女に「中華人民共和国名誉主席」の称号を授与した。5月29日、88歳で死去。

まだまだ記することはたくさんあるが、中国が大きく変貌した一世紀の中で波乱万丈の人生を送ったのである。死後は上海市内にある「宋慶齡陵園」に葬られた。孫文の墓地は南京・紫金山中腹にある「中山陵」であるが、慶齡は合葬を望まなかったのだろうか。お互いに尊敬しあっていたようであるが、近代革命先行者（＝先駆者の意）として「国父」と呼ばれる孫文にすこし遠慮したのかと思ったりする。

さて、覆いかぶさるように葉が広がっている木々を見上げながら門に入る。受付があり20元支払う。中に入ると記念広場が広がっており、その中に椅子に座った宋慶齡が鎮座している。大理石の彫刻のようで真っ白に輝いていた。すこし微笑んだおだやかな表情をしている。その奥が「宋慶齡博物館」である。正面に彼女の胸像が置かれ、そこから順に展示物を見て回った。彼女の自筆の書や写真などが所狭しと展示してあったが、一番目を引いたのは孫文との結婚の誓約書である。漢字とカタカナで書かれているが、果たして二人は日本語はどの程度理解できたのであろうか。とりあえず内容を紹介したい。まず最初の一行は、「今般孫文ト宋慶琳トノ間ニ婚約ヲ結ビタルニ付、左ノ諸件ヲ誓約ス」と書かれ、次のように三点書かれている。

- 一、成ルヘク速ニ支那ノ国法ニ依ル正式ノ婚姻手續ヲ執ルヘキ事
- 二、将来永遠ニ夫婦関係ヲ保続シ各自相互ノ幸福ヲ増進スルニ努ムヘキ事
- 三、万一本誓約書ニ背反スル行為アリタル時ハ法律上並ニ社会上ノ制裁ヲ受クルモ各自何等依存ナキコト 從テ各自ノ名誉保持等ノ為メ各自又ハ其ノ親族ヨリ各自ニ對シテ為ス措置ニ付イテハ一切苦情ヲ申出ヲサルヘキ事

誓約書は、三通作成し孫文、宋慶齡が各一通、もう一通は立会人で弁護士の和田瑞氏が保有するとした。



日本語で書かれた孫文との結婚の誓約書



宋慶齡故居内の石像

この誓約書は本物だと思うが、何点か気になることがある。まず記されている宋慶齡の名前も最後の自筆の署名も宋慶琳となっていることだ。次に孫文と和田弁護士の署名の下には印鑑が押されているが宋慶齡の自署の下だけは押されていない。自分の保管用であるから押さなかったかもしれない。ほかの2通は押されているのか確認したいものだ。本誓約書の日付(結婚式の日付ではない)は、1915年10月26日となっているが、〈支那の国法〉による結婚式はいつなのであろうか。ある本には1915年の10月25日に結婚したと書かれているものもあれば、ある資料は1914年と書かれている。何かすっきりしないものがある。ネットで調べると、「結婚式については諸説ある」とあり、「この結婚を整えたのは資金援助をしていた梅屋庄吉である」とあった。梅屋庄吉の説明をする紙幅はないが、日本の実業家で孫文の支援者である。私はまだ行ったことはないが、上海の紹興公園に彼の銅像がある。

ところでなぜ立会人のもとで結婚誓約書を書いた

のであろうか。孫文は立派な人物であるが、男女関係においては疑問符が付く。1902年、彼は中国に妻がいたにもかかわらず日本人の大月薫という女性と駆け落ちに近い形で結婚している。中国人の妻とは1915年に離婚が成立しているの、いわば重婚である。日本人妻との間には一人の女の子を設けたが3年で離婚している。日本には彼の外孫もいる。宋慶齡とは中国人の妻との離婚が成立してから結婚式を挙げたのであろう。従ってとりあえず誓約書という形にしたのかもしれない。

ここでもう一度合葬について付記したい。ネットによれば、生前に埋葬のことを決めていたと書かれているものがある。慶齡の死の3か月前に彼女の世話を53年の長きに亘って続けてきた「李燕娥」という女性が亡くなったが、慶齡は彼女に対して自分たちの骨灰を一緒に埋葬することを誓っていたというのである。事実と思われるがこの誓いの裏には孫文との合葬という特別扱いを望まない高潔さを見る思いもするが如何であろう。孫文との結婚生活が10年であるのに対し李さんとは53年もの間苦楽を共にしたのであるから、情の深さは孫文と言えどもかなわないであろう。

博物館を出て宋慶齡が長く過ごした邸宅に入る。2階建の堂々とした建物である。客間、食堂、公務用の部屋が続くがそれぞれ調度品などはとても豪華である。暖炉付の寝室は広くて華やかな雰囲気である。その近くに李燕娥の寝室がある。広いが質素である。1回には土産物コーナーがあり、彼女の写真4～5枚と本を購入した。ゆっくり見た後、芝生のかなり広い庭の見える所に出たが、残念ながら庭には入れなかった。庭の方から邸宅全体の写真が撮りたかったが。

実は宋慶齡の故居は、北京市内の故宮博物院の近く、後海のほとりにもある。彼女はこの邸宅で1963年～1981年、亡くなるまでの18年間住んだ場所である。以前は清朝最後の皇帝である溥儀の父親の邸宅であったが、周恩来の配慮でここに住ませたようだ。勿論李燕娥が身の回りの世話をしたのであろう。

(続く)